

老いへの関心は、生きることへの関心

—「高齢者心理」を大学生が学ぶことの意義—

久保田 美 法^{*}

はじめに

本学の実践心理学科で2013年度より「高齢者心理学」を担当するようになった。どの科目にも言えることではあるが、その授業で「何を教えるか」という問題とともに、その内容が受講者である「学生自身にとって」どのような意味をもつかは、教員として常に考えさせられる課題である。

殊に超高齢社会の現代、将来の担い手である学生が「高齢者心理」を学ぶ重要性は、社会からの要請としても、また高齢者からのニーズとしても、増していると推察される。では、学ぶ側の学生にとってはどうだろうか。職場や家庭で、高齢者とかかわる際に、その「心理」を知っておくことは確かに有用であろう。しかし、それとともに、若者の内側から発せられるニーズもなければ、真の「高齢者心理」の学びは成り立たないのではないだろうか。学生自身にとって意味ある「高齢者心理」の学びとは何か。また学生からのニーズがあるとすれば、それはどのようなものであり、それに応える「高齢者心理学」とはいかなるものであろうか。

本稿では、未だ2年ではあるが、筆者が担当している「高齢者心理学」に対する学生の感想から、青年期にある若者が「高齢者心理」を学ぶことの意味を考え、あわせて大学生を対象とした「高齢者心理学」はどのようにあるべきか、その課題や可能性を探ることにしたい。

1. 「エイジング教育」と「高齢者心理学」

高齢化および高齢者をめぐる様々な問題を、ジェロントロジー（老年学）の研究成果を踏まえつつ、学校教育の中で学んでもらおうとする試みに、「エイジング教育（Education about Aging for Students: EAS）」がある。日本において早くから「エイジング教育」を提唱し

^{*}総合福祉学部 専任講師

ている谷口（1999）は、これを「『高齢化・高齢者』についての知識教育や実践活動のことであり、高齢社会に備えるための市民教育のすべて」と定義している。

エイジング教育が提唱されるようになった背景には、核家族が増え、高齢者と日常的に接する機会が減少したことが挙げられる。加齢現象や高齢者に触れる機会が少ないと、どうしても「エイジズム」と呼ばれる、高齢者に対する偏見や差別が生じやすい。高齢者に関する正しい知識を身につけることは、超高齢社会の在り方を自身の問題として考えることにもなる。こうした流れを踏まえて、村上・川崎（2010）は、学校教育の中でそうした時間をもつことの重要性を指摘し、「世代間交流を子どもの側から促進し、また子どもたちが自分たちの将来を見据えて今できることを主体的に行動できること」を意図した授業化に向けた実践案を提示している。

大学教育における「高齢者心理学」も、広くはこの「エイジング教育」に位置づけることもできるだろう。「高齢者心理学」の教科書（権藤（2008）、近藤（2010）、下仲（2012）等）を概観すると、「高齢者の感覚、知覚」「高齢者の記憶」「高齢者の知能」「高齢者の人格」と、「心理学」の基礎的な項目に沿って、高齢者のそれはどのようなものであるかを学べるようになっていくものが多い。またそれに次いで「高齢者の社会適応」や「高齢者の心理的な問題」が挙げられ、高齢者の心理アセスメントや高齢者の心理療法にどのようなものがあるかが列記されている。

これらは「高齢者の心理に関する知識を得る」という点で、一定の意義があるだろう。しかし、いずれも高齢者を自分とは切り離れた「対象」としてみたり、「高齢者とのかわり」を考えると意味では、距離があるように思われる。様々な加齢現象について理解することと、そうした事態を高齢者本人がどのように体験しているかを知ることは同じことではない。また高齢者一人ひとりに主観的なこころの世界があり、そうした高齢者のこころに接して、かわる側に感じられるこころの動きもあるはずである。そうした生きたかわりを含めた「高齢者心理学」とはどのようなものになるだろうか。

2. 「世代間継承」としての「高齢者心理学」

心理臨床家の進藤（2001）は、「高齢の方々がこちらに伝えてこられる知恵や苦悩の普遍性に接して、誰しもが老年というものに心を開くことができれば学ぶことが多いであろう」と感じてきた経験から、そのための「老年に対する感性を耕す試み」として、自身が担当する「老年心理学」の授業を「エイジングエデュケーション」と名づけている。また伊藤（2014）¹⁾も、「老年期の心理学」の授業を「エイジング・エデュケーション」と位置づけ、「自身も老いゆく存在として、あるいは周囲の老人と関わる次世代として捉え」自身のライフサイクルの展望を描くワークや老人の知覚体験、認知症検査の実習、様々なお年寄りの生

き方に触れるためのビデオ視聴などを実施している。また水上（2014）は「高齢者心理学」の授業目標を「自分や自分の身近な人の『老い』について考える」ととし、また高齢者の様々な「喪失体験」に焦点を当て、それに対する心理的援助について考えることもテーマに挙げている。これらは、高齢者のところに、学生自身のところを通して触れていこうとするものと考えられる。

そもそも高齢者は「対象」としてのみ存在するわけではないし、援助等が必要とされる場面でも、それは一方的なものではなく、「かかわる」双方にとっての意味があるはずである。

E.H.エリクソン（1997）は、老年期の心理的課題として「統合」を挙げたが、これは個人の人格に備わる一つの稀有な特質だけを意味するのではなく、次世代や共同体が人間の統合的な生き方を理解しようとして、老年の言葉を「傾聴」することが重なりあっているものである、と述べている。また山口（1994）は、人間形成は本来つねに自己形成と他者形成との相互連関であるが、その関係は高齢者と次世代の間にも存在すると述べ、高齢者は「老いと死の危機の苦闘そのものを通して、自分の経験や知恵を伝えることによって、有用なものを生み出さず、何も語らずとも、その『存在の仕方』そのものによって」次世代へ「贈り物」をすると述べている。

高齢者と次世代は互いに相補い、生かしあう存在である。青年期にある学生が、高齢者を自分自身にとって必要な存在と感じ、高齢者から豊かな「贈り物」（山口，1994）を受けとることができれば、それは高齢者にとっても意味があるのではないだろうか。またそれがひいては、高齢者への援助をよりよいものにすることにもつながるだろう。次世代が高齢者から「何を受けとれるか」は、問われるべき課題である。

さて、進藤（2001）が自身の試みを「エイジングエデュケーション」と名づけたのは、「デスエデュケーション（死の準備教育）」をもじったものとされている。進藤（2001）は「人生の前半で、ライフサイクルを俯瞰する視点に出会い、自分自身の老いや死を考えることは、たやすくはない」が、「その考えを導いてくれる先達（高齢者）と出会う可能性」はあり、自分が年老いて「実際に困難を感じたときに、年長者（先人）から学ぶという姿勢を知っていることや、自分がどのような（心理的）危機のなかにあるかを同定する知識をもっていることは、その困難を耐え易くする」と述べている。しかし「エイジングエデュケーション」の学生側にとっての意味は、親や自分自身の老いへの「準備」に限られたものだろうか。高齢者の心理について学ぶことは、「将来」のことにのみならず、学生の「今、ここ」にとっても、寄与するところがありはしないか。

3. 内的体験としての〈老いる〉

そもそも老いることは、老年期に限ったことではない。誕生と同時に死に向かっているの

が生物の宿命であり、老いることは、年齢を問わず、一人ひとりの生きることに内在している。栗原(1986)は、「死の方への生長」としての〈老いる〉は「虫や花や人の死との出会いがあり、直線的に進行する時計の時間と異なる時間を、からだの感覚で受けいれる」子どもや青年の時期に宿り、生長を始めると述べ、また、青年期のアイデンティティ形成の課題と〈老いる〉はとりわけ関連が深いことを指摘し、「アイデンティティは、過去的生活史を未来の展望に結び付け、生き方の原型を自分の身体に見出す、全身心的な力動作用であり、その生き方の原型は、死に方の原型を含まないではない」と述べている。

また駿地(2013)は、「成長」と「老い」が英語ではどちらも“grow”にかかわることを指摘し、今まさに「成長」と「老い」の過程のさなかにある青年期を対象に〈老いる〉プロセスに対するイメージと、自身が〈成長する〉イメージを調査し、その「内的イメージレベルでの相互作用」を検討している。さらに駿地(2013)は高齢者に対するイメージの研究でよくとりあげられる「祖父母との同居経験の有無との関連」についても、「同居経験がどのように心理的に体験されている(いた)か」という「体験の質」をみていく必要性を指摘している。確かに「かかわり」には「直接的なかかわり」だけではなく、「内的なかかわり」もあり、「〈老いる〉プロセスに対する個人の主観的内的体験」に着目する視点は示唆に富む。

「高齢者心理学」は実習科目ではなく、講義の中で直接高齢者にかかわることはない。しかし、直接かかわることはできなくとも、イメージの中で高齢者のこころを感じたり、心動かされ、時に胸の内で高齢者に語りかけることはあるだろう。そうした「イメージ上のかかわり」を重ねていくことが、内的体験としての〈老いる〉を深め、またそれが「実際のかかわり」につながることもあると考えられる。講義科目の中で「高齢者のこころに、自分のこころをつかってかかわる心理学」をめざすことはできないだろうか。

4. 筆者が担当する「高齢者心理学」

シラバスの授業内容は「加齢に伴う様々な変化とその心理的な影響や、高齢期の心理的テーマについて概観するとともに、そのそれぞれの局面を高齢者はどのように生きているか、その姿や声に触れ、その思いに耳を傾けること」とし、具体的には各回のテーマに沿った映画やドキュメンタリー、事例等を紹介し、その感想をリアクションペーパーに書いてもらった。これらを通して「高齢者と出会うこと、共に時間を過ごすことの意味について、自分なりに感じ考えることができること」が授業目標である。

リアクションペーパーに書かれた感想には、学生ならではのフレッシュで率直な思いが綴られていた。本稿ではこうした感想から、大学生が高齢者のこころに触れるとはどういうことか、どのような時に、どのように心動かされるのか、学生の「今」にとって、「高齢者心理」を学ぶことにどのような意味がありうるかを探ることとする。

なお、リアクションペーパーに記述された学生の感想を論文に掲載することについては、期末テストを終了し、成績評価を終えた後、掲示で研究趣旨の説明とその許可を依頼し、一定期間内に筆者に連絡があった者の感想については掲載しないこと、またその期間内に特に申し出がなかった者については了解を得たこととする旨を伝えた。

5. 「高齢者心理学」を受講した学生の感想から

第1回目の授業では、最初に各自の「高齢者」や「老年期」のイメージを書いてもらい、その後「高齢者心理学」で何を学びたいかについての記述を求めた（以下、学生の記述は楷書体で記す）。

「若かった頃と比べて何が一番変化したか。」

「年をとるとどのような不便がでるか。」

「日常生活を送る中でどのような心理状態にあるのか。」

「自身が高齢者とみられる時の心境。」

「高齢者の人が一番望んでいること。一番喜びを感じるのはどんな時か。」

「死に近くなっている中でどういった心境でいるのか。」

「高齢者から見た私たち世代はどのように見えるのか?」

「普段おじいちゃんおばあちゃんを見て不思議に思うことが少しでも理解できたら。」

このように高齢者の加齢についての感じ方や体験世界、高齢者からみた若者世代、学生からみた高齢者の不思議を述べた言葉が並ぶ中、以下のような記述もあった。

「まだ自分が経験したことがないことを学ぶのはとても興味がある。学んでいきたいことは具体的には分からないが、ただ興味がある。」

「具体的には分からない」とは、問題意識や目的意識に少々欠けるといった見方もあるだろう。しかし具体的に思い浮かべるのが困難なほど「まだ自分が経験したことがない」ことに対して純粋な興味があるようにも思われる。このような漠然としているが何か強さも感じられる関心は、どこから生まれてくるのだろうか。

また、過去に高齢者とかかわった体験を述べ、「悔しいので学びたい」と表現する学生もいた。そこには、もっと気持ちを分かってあげられたら、もっと違うようにかかわれたらという、どこか切実な思いが感じられたが、目下、特に高齢者と接しなければならないというわけでもなさそうであった。にもかかわらず、そうした時のために学びたいという気持ちはど

こから来るのだろう。「悔しいので学びたい」という言葉には、自分がどのような人間になりたいかという、ある種の願いが含まれているようにも思われる。自分の無力を思い知るような体験から立ち去ろうとせず、むしろ彼女をして、そこに立ち向かおうとさせているものは何だろうか。

(1) 「はちきれんばかりの記憶」

授業の2回目では、加齢による様々な変化を概説した後、そうした過程を高齢者本人はどのように感じながら日々生きているかが細やかに描かれた『輝く湖にて』（NHK、2004年）というドラマを視聴した。

主人公である初老の夫婦の姿や様子から感じたことを問いかけた中に、以下のような感想がみられた。

「ケンゾウさんとシズエさんみたいに長く続いて寄りそってきたのは、ドラマには描かれない関係や積み重ねがあったのだと思う。」

「二人が互いをなくてはならない存在として大切に感じていることを、どの場面からも感じた。描かれていなくても、二人が長い年月を重ねた末に今の関係は気づかれているのだということが感じられた。」

エピソードとしては具体的に描かれていない積み重ねられた人生を感じとる学生の想像力と、そういうものを喚起させる高齢者の力がうかがわれる。後者には俳優（杉浦直樹・八千草薫）の演技力や存在感、俳優自身の人生も映されていたと思われるが、それもまた「積み重ねられた人生」の力であろう。

高齢者のこれまでの様々な体験に思いを馳せた後、次の回では「忘れられない記憶」というテーマをとりあげ、いくつかの事例を紹介した。

「たかだか20年そこそこ生きてきた私達にもたくさんの忘れられない記憶があって日々苦悩しているのだから、80年も生きてきた人達の心の中には、はちきれんばかりの記憶や思い出が詰まっているのだろう。おじいさんおばあさんが持っている独特の深みのようなものは、きっとこういった心と体に刻まれた経験からきているのだろうと思った。」

高齢者の姿に「独特の深み」を感じるとともに、それを「はちきれんばかり」と表現するところに、若い学生ならではのエネルギーも感じられる。

しかし「はちきれんばかり」の「心と体に刻まれた経験」のすべてが、言葉で語られるわ

けではない。

「(高齢者の言葉は些細なものでも)生きてきた時間の分、『憂』という表情が見え隠れてしているように感じた。そこには常に影や時には悲しみ、あきらめにも似た想いが一緒に混ざっているのではないだろうか。たくさん出来事は起きて、その度に色々な感情も抱いたけれども、全てを語るにはいろいろありすぎた故の、一言や、短い語りになっているように感じた。」

ほんの少しの言葉にも「憂」があることを感じとり、また短い語りになった背景や心の動きにも思いを馳せる感性は、先の具体的なエピソードは分からなくても、その姿に「人生」を感じる心の動きとも通じているように思われる。

またこうした事例に接して、次のような気づきを語った学生もいた。

「私の祖父も戦争経験者です。でも戦争に参加する前にポツダム宣言があつて、祖父から聞いた戦争の話は辛いことの方が少なく、軍隊を抜け出して近くの河口でうなぎを獲ったりしていたという話しか聞いていなかった。だけど、もしかしたら祖父は辛い話を聞かせたくなかっただけなのかもしれない。祖父の知人親戚が一人も死ななかつたわけではないと思う。だから今回の認知症の男性が語った戦争の話は新鮮だった。」

もちろんこの方がどのような体験をされ、その内の何を孫に語り、あるいは語られていないのかは分からない。けれども、辛い出来事は「聞かせたくなかっただけなのかもしれない」可能性に気づくことは、この学生にとって、これまでの祖父のイメージに小さな裂け目ができるようなことだったのではないだろうか。そこから、これまで語られなかつた出来事を知るようになることもあるかもしれない。が、そうではなくとも、見知った祖父の、知られざる想いや生き様がありうるということに触れること、それ自体にも、人間というものの深淵を知るという点で、一つの意味があつたのではないだろうか。

(2) 「僕にはまだ分からない」

高齢者の姿や言葉にこもっているものの凄さを述べた感想がある一方、先の老夫婦のドラマについて、次のような感想もあつた。

「よくわからなかつた。人それぞれ背負っているものがあると思うが、何をどうやって背負っているのか、背負ってきたのかかわからず、その人の心情など理解できなかつた。年齢を重ねると、その人の歴史が大きすぎて、僕には入りきらず、色々と分からなくなる。」

これは「背負ってきたもの」への「想像力」が貧しいことを意味するのだろうか。「その人の歴史が大きすぎて」という言葉から、この「分からなかった」は、「その歴史の大きさ」にまともにぶつかったからこそ出てきた言葉のようにも思われる。先の「ドラマに描かれていない関係を感じた」という感想とこの意見は対照的なようで、必ずしもそうではない。これも、「高齢者の積み重ねられた人生」を感じる、一つの体験の仕方である。

考えてみれば、描かれてはいない出来事の実際が「分からない」のはその通りであり、「分からない」のが本当であるとも言える。先の学生も「積み重ねられた人生」を「分かった」と書いてはおらず「感じられた」と表現していた。

また土居（1976）の「老年期の死生観は単に語られるものでなく、現に生きられているゆえに本物」であり、「日々死に直面していることで備えられた『強さ』をこそ、若者は尊敬すべき」とあるという言葉を紹介した回には、こんな感想もあった。

「高齢者は日々死と向かいあって生きていて、それに立ち向かっていく強さがあるというのは、聞くまではよく分かっていなかったが、知ると正にその通りだなと思った。それは私にはまだ全く分からない強さだなと思った。またこの先自分がそれを得ることができるのか、とても自分にはできない気がして不安になる。」

「(高齢者は死の受容が) 出来ると考えているとすれば、それは強がりを行っているからなのか、それとも本心からそう考えられているのかの境がとても難しく気になる。」

これも「私にはまだ全く分からない」ということを正直に述べた感想である。頭では「分かる」ように思うが、実感としてはよく分からない。いつかは分かるのかもしれないが、そうなった自分は想像がつかない。

しかしこの学生は「全く分からない」からといって、“私とは無関係”なことと切り捨ててはいない。「強がりなのか本心なのか」の「境」を気にするのも、自分のこととしてみようとしているからこそであろう。「全く分からない」と言いながら、その感覚を反芻し味わうことは、この学生に何かをもたらしているのではないだろうか。

(3) 「正直意外」と「不思議な感覚」

先のドラマ『輝く湖にて』では、加齢による日々の変化を時に皮肉交じりに吐露するシーンもあり、高齢者のそうした姿に軽い驚きをおぼえた感想もあった。

「会話の具体的な内容は違うものの、会話の様子は若い人とはそう違いないと感じた。このドラマで語られていた心情が世間一般の高齢者の心情と通ずるものがあるならば、自分が思い

描く高齢者とはほど遠く、不安や心細さを抱えていることが正直意外だった。身近な高齢者からはそうした心情を聞いたことがなかったが、もしかしたら理解されないという気持ちがあるのかなということを考えた。」

“高齢者だって悩むんだ”とでもいうような発見は、身近にいても遠かった高齢者が、自分と通じ合える存在へと一歩近づいた出来事だったかもしれない。さらに、この学生は「遠い存在とさせていたのは自分たちかもしれない」という気づきも得ている。

このドラマに限らず、「高齢者は正直〇〇と思っていた」という言葉は、様々な機会に散見されたが、特に高齢者の恋愛をとりあげた映画『ナビィの恋』（中江裕司監督・平良とみ主演、1999年）では、それが多くみられた。学生にとって、恋愛は身近で大きな関心事の一つであるとともに、自分たち若者（だけ）のものと思っていたがゆえに意外であったようである。

物語の主人公、沖縄のおばあであるナビィは、かつて島の風習によって引き裂かれた恋人サンラーの60年ぶりの帰郷に心揺さぶられ、最後にはその男性と島を出ていく。

長年ナビィを大切にしてきたおじいがいるにもかかわらず、心揺れるナビィに“いい気持ちがしなかった”という感想もあったが、まるで乙女のように恋するナビィの姿をみるうちに“年齢なんて関係ない”“高齢者も恋をするのは自分たちと変わらない”といった親近感も感じたようであった。

しかし、映画には“自分たち若者と同じ”だけではない姿も描かれている。おじいはその悲恋を承知の上でナビィを妻とし、ナビィはそのおじいの気持ちをしっかりと受けとめ、互いに夫婦として誠実に過ごしてきた何十年という歳月が二人の間にはあり、だからこそ、ナビィが島を出ていくと決意したことを、おじいは黙って受けいれ、ナビィもおじいのその想いを胸に旅立つのだ。その姿は実に爽快である。

「若い人や中年の人が配偶者以外の人と恋をした場合は不倫であるとかブラックなイメージがあるが、高齢者の場合はピュアだと思う（自分もそう思う）のは不思議な感覚だと思った。」

「ナビィは言ってしまうと『若くない』。『若くない』というのは、たくさんのことを知っているということで、たとえるなら、様々なものが重ねがさね描かれたキャンバスだと思う。それが若く（新しいキャンバスのように）見えるということは、今までの絵を捨てたか、消したか、ぬりつぶしたか……。何にしてもすごく覚悟がいると思う。」

「ナビィの恋は全てが『若かりし頃』のものなのだ。それは色褪せることなく、おじいと家庭を

持ち、共に老いていく時間の流れとは別に、そっとどこか心の隅に置いてあって、サンラーとの再会と共に水を得て輝きを取り戻したもの。時が止まっていた頃の気持ちの瑞々しさが月日を得た身体へと重なり、そのアンバランスさが堪らなく愛しく私達の目に映ったのではないか。」

「ブラック」と「ピュア」, 「若くない」はずなのに「若い」, 矛盾しているようで矛盾していないのは、夫婦が共に老いていく時間の流れ「とは別に」, もう一つの時間が「心の隅」でそっと流れ続けていたからである。そのことに不思議なインパクトや感慨があったことがうかがわれた。

(4) 「足元が確かになったような安心感」

この『ナビィの恋』を観て、自身の祖父母の恋愛を想起した学生もいた。

「私の祖父はずっと祖母に片思いのまま結婚生活を送っているようだったが、祖父が亡くなり、棺に入っている姿を見た時、祖母は声をあげて泣いた。祖父にとって祖母は生きがいそのものだったが、祖母にとっても祖父は“生きる源” だったのだとその時感じた。(中略)

夫を亡くした祖母の様子はまるで恋人を亡くした少女のようだ。きっと祖父がいたからこそ、口や態度には出さなくとも祖母は若い気持ちのままでいれたのだと思う。しかし祖父は生前より祖母にかまってもらえて幸せなのかもしれない。私は60年あまり恋を続けた2人の孫として生まれる事ができて良かったと思っている。」

また、高齢になっても初恋の人を想い続けたナビィの姿と自分とを照らし合わせた、次のような感想もあった。

「高校時代の恋愛が忘れられないでいる。未練は全くないが、今会ってもドキメク。この恋心はもしかしたら年をとっても思いを抱くのかなと思った (今は別の恋をしている)。」

時の重なりや、日常の現実とは異なる「もう一つの時間」が流れ続ける可能性に触れ、自分もそこに連なる者としてあること、そうした遙かなものに通じていると感じたことがうかがわれる。

このように高齢者を自分と隔絶したものではなく、深いところで確かにつながっている存在として実感した様子がうかがわれた感想には、次のようなものもあった。

映画『モリー先生との火曜日』(M. ジャクソン監督, 1999年) は、スポーツライターとして華々しく活躍しているミッチが、ある時、大学の恩師モリー先生が死に瀕していることを

知って再会を果たし、そこで先生から「人生で一番大切なこと」を教わっていく。その2人の交流を軸にした映画であり、モリー先生の温かなユーモアが光る映画でもある。

「モリー先生の『生きよう』『残そう』という健気さが愛しくなった。モリー先生は死ぬことよりも『自分が何も残さない』ことの方が恐かったのだと思う。そういった意味で、モリー先生曰く『恐いものだらけ』のミッチは、語り役としてこれ以上ない相手だったのだろう。けれども本当にモリーはヒーローだったのだろうか。ミッチの心に迫り、ミッチの心へ自分を残そうとしていた姿は寧ろ、救われたい一心の、健気な姿だったのではないだろうか。暴きたかったのは、モリー自身の心だったのかもしれない。理論で武装して、誰よりも死に立ち向かい勇気を得たかったのは、モリー自身だったのかもしれない。死を受け入れて、ある意味悟りを開いてしまったようなモリーも、死は恐い。生きて残すことに必死なのだと考えただけで、今生きている足元が確かになったような安心感を覚える。」

一見、英雄のようにみえるモリー先生に人間くささを見出し、“人が生きるとはこういうことなのだ” “それでよいのだ” というような発見が、自分自身の生がそのまま肯定される感覚につながっている。

(5) 「抽象的なもの」——「『人』を表す何か」

期末テストでは、最後の問題で「この授業で最も印象に残っていること、学んだこと」を書いてもらった。

「高齢者というよりは、人の生き方、考え方を垣間見ることができたので、それを嬉しく思っている。」

という感想があり、またある学生は『ナビィの恋』を挙げ、もちろん強制するものではないと前置きしながら、「恋愛療法」とでもいうものがあれば、高齢者の生きがいにつながるのではないかと述べ、次のように書いている。

「この授業を通して『恋愛療法』などという、ある種とんでもない考えも出てきた。これは高齢者に対するイメージが変化したことが大きい。高齢者の姿や語りに想いを巡らすことが少しでもできるようになったと感じる。そのことが自分の中で成長できたことだと思う。」

まさに「垣間見る」ほどのところではあっただろうが、「人の生き方、考え方」を知った

ことを「嬉しく思」ったと表現していたり、「高齢者の姿や語りに想いを巡」らせるようになったことを、自身の「成長」と呼んでいるのが興味深い。

また次のような記述もあった。

「多くの作品に触れたが、どれも抽象的だったように思う。事例として見る事が出来るため『具体的』ではあるのだが、伝えようとしていることは漠然としていて捉えづらいものがあった。『理解している』というのではなく『感じた』といったニュアンスが近く、何かしらを受けとることができたと思うが、それを口頭で説明することは難しい。そのため、作品を見た後の感想を書くのは毎回『どう言葉にすればいいのか』わからず、考えさせられた。（中略）

（考えてみると）『高齢者』は『人』であるということは頭では分かっていたつもりなのだが、今まで『人』としてではなく『対象』としてただ見ていただけのように思う。この講義を通じて『抽象的なもの』を感じることで、高齢者を『人』として実感することができたように思う。依然『抽象的なもの』は理解が難しいが、それが『人』を表す何かなのだろう。」

「抽象的」とは少々難しい表現であるが、この学生が言う「抽象的」とは、頭では「分からない」けれど「感じられる」ものであり、生きた「人」として交流可能なものを指しているようである。高齢者を“自分にとって生きた意味のある存在”と「感じられる」ことは、先の学生の「嬉しかった」や「成長」という言葉とも、どこか通じているように思われる。

考えてみると、「今生きている足元が確かになったような安心感」を述べた学生も、「どのように生きたらよいか」という「具体的」なモデルを得たというより、自分の生き方を支えてくれるような「足元が確かになった」感覚を述べていた。これも「抽象的なもの」と言えるかもしれない。

ところで「抽象的」とは本来「観念的」や「具体性を欠く」といった意味であり、先の学生が「抽象的」と述べたところは、“本質的”とでも言い換えた方が適切なようにも思われる。しかし、この学生がわざわざ「具体的」という言葉と対比させて「抽象的」という表現を用いたのには、それなりの意味があったのではないだろうか。もとより作品や事例は「具体的」なものであり、そのことは学生も認めている。しかし彼が心動かされたのは、そうしたもろもろの「具体的」なものを超えた、あるいは「具体的」なものを支えている何かの方だったのではないだろうか。しかし「具体的」なものを抜きにして、そうしたものを感じとるのは難しい。それゆえ「具体的」と対の「抽象的」という言葉が出てきたのかもしれない。「抽象的」とはこの場合、「具体的」なものに根差しながらも、「具体的」な形はとりにくい、目には見えない次元のことを指していると考えられる。

(6) 「存在がない空間が『ある』」

これまでみてきたように、学生たちの感想には、祖父母の恋愛にしろ、自分のそれにしろ、自身の心に刻まれた“大切な時”が想起されたものがしばしばみられ、そうした言葉には、日常のトーンとは異なるものが感じられた。以下の感想も、そのような“大切な時”にまつわると思われるものである。授業の最終回「ただそこにいることで」をテーマに、認知症者の姿を紹介した時のものだ。

「私は最近自宅で飼っていた猫を亡くした。体が冷たくなっていくこと、固くなっていくことが、猫の心臓がもう動いていないことを伝えてくる。死んでしまったのはわかるけれども、でも、その体を、その存在を失いたくなかった。あるバンドマンが、人がいなくなったとき、存在が『ない』のではなく、その存在がない空間が『ある』と言っていたが、まさにその通りだと感じた。結局自宅の庭に埋めたが、死んでいてもいい、ただ存在がそこにあってほしいと感じた。ちょっと違うけど、“ただそこにいることで”を聞いて思ったことです。」

「存在がない空間が『ある』」とは、目に見えないが確かにあるもの、その息づかいや温もりが、自分の今を支えているという感覚であろう。これもまさに「具体的」なものを超えた「抽象的な何か」と言えるのではないだろうか。

また期末テストの最後には、こんな感想もあった。

「この授業を聞いていると、祖母がまだ元気に話せていた頃を思い出すことが出来た。それと同時に、もっと祖母と話せば良かった、まだ八つ当たりしたことを謝っていない等、後悔もたくさん頭に浮かんできた。そのおかげといっちは言い方が悪いかもしれないが、祖母のお見舞いに行く勇気が出た。今では一週間に一回だがお見舞いに行っている。授業の感想ではないかもしれないが、個人的にお礼を言わせてください。ただ、授業を聞きながら上記のようなことを考えていたので、内容はあまり頭に入りませんでした。」

この学生にとっては「授業内容」が頭に入ることよりも、「祖母に会いに行けた」ことの方が確かに成果であっただろう。しかしなぜ祖母に会おう、会いたいと思ったのか。そのベースには、“おばあちゃんって、こうだったよなあ”という、この学生の「高齢者体験」があり、それが授業によって喚起されたところがあったのではないだろうか。「授業内容」という新しい知識が「具体的」であるのに対して、彼の「高齢者体験」を彷彿とさせたものは「抽象的」——「具体的」なものの底に流れていたもの——と考えられる。

その内実は、学生一人ひとりの個人的体験によって異なるだろうが、「高齢者心理」を学

ぶ時に学生が求めるものには、「高齢者体験」とでも呼ぶべき「抽象的なもの」——高齢者の「具体的」な語りや姿の奥に流れているもの——があるのかもしれない。それこそが、学生の「今、ここ」を支える「安心感」や「成長」を生み出すのではないか。

この「抽象的なもの」とは、学生の感想の冒頭に挙げた「経験したことがないことを学ぶのはとても興味がある。具体的には分からないが、ただ興味がある」という言葉ともまた呼応しているように思われる。

おわりに

筆者が担当している「高齢者心理学」の感想から、学生が高齢者のところに触れた時にどのような体験をしているかを素描してきた。

タイトルに挙げた「老いへの関心は、生きることへの関心」は、かつて恩師が筆者に語ってくれたものであるが、学生たちの感想は、まさにこの言葉を思い出させるものだった。

「教育」は「教」と「育」からなるが、高齢者や加齢についての知識を「教える」だけでなく、高齢者の語りや姿を紹介する中で、学生が自分にとって必要なものを「見出す」ものがあることが示唆された。それをいかに捉え「育」ていけるかは、教員としての課題であろう。またここから、「高齢者と若者のつながり」を考えていくこともできると思われる。

もとより今回提示したのは、学生の感想が内包しているものの一端にすぎない。この他にも様々な読みやテーマがあるだろう。また授業後半で大きくとりあげた認知症についての感想は、今回触れることができなかった。高齢者の心理に関するテーマが多様であれば、それに対する学生の捉え方も様々であり、それら一つひとつについて、詳細に検討していくことは今後の課題である。また今回とりあげた学生の声は貴重ではあるが、こうした想いを抱くのは一瞬のことでもあるのかもしれない。その一瞬をいかに捉え、どのように深めていけるか、これから考えていきたい。

注

- 1) 伊藤は2014年現在も「老年期の心理学」を担当している(文献(伊藤, 2014)参照)が、「エイジングエデュケーション」としての内容を詳細に記しているのは、京都ノートルダム女子大学教員閲覧データベース (<http://www.e-syllabus.net/db/detail.php?id=43> (2014年11月20日閲覧)) の「老年期の心理学」(2003年~2008年度)の項目においてである。

文 献

- E.H. Erikson/J.M. Erikson (1997) *THE LIFE CYCLE COMPLETED*, W.W. Norton & Company, Inc., New York, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳, ライフサイクル, その完結, みすず書房, 2001.
土居健郎 (1976) 老年期の死生観, 長谷川和夫・那須宋一編, *HANDBOOK 老年学*, 岩崎学術出版, pp.266-273.
伊藤一美 (2014) 京都ノートルダム女子大学シラバス「老年期の心理学」

<https://mutsuki.notredame.ac.jp/syllabus/syldatainfo.do?blockId=2102&asdpId=89999&crisyunen=2014&semekikn=1&ckougicd=26505501&crclumcd=3401> (2014年11月20日閲覧)

権藤恭之 (2008) 高齢者心理学, 朝倉書店.

近藤勉 (2010) よくわかる高齢者の心理, ナカニシヤ出版.

栗原彬 (1986) 「老い」と〈老いる〉のドラマトウルギー, 伊藤光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編, 老いの人類史, 岩波書店, pp.11-48.

水上喜美子 (2014) 仁愛大学人間学部シラバス「高齢者心理学」.

<http://www.jindai.ac.jp/uploads/jindai/2014-syllabus-human.pdf> (2014年11月20日閲覧)

村上裕幸・川崎惣一 (2010) エイジング教育 (Education about Aging for Students: EAS) の授業化に向けて, 北海道教育大学釧路校研究紀要第42号, pp.49-59

下仲順子 (2012) 老年心理学, 培風館.

進藤貴子 (2001) エイジングエデュケーションの試み, 山中康裕編, 魂と心の知の探求—心理臨床学と精神医学の間, 創元社, pp.426-432.

駿地真由美 (2013) 青年期における〈成長する〉及び〈老いる〉ことに対するイメージの研究, 追手門学院大学地域支援心理臨床センター研究成果報告書, pp.104-119.

谷口幸一・佐藤真一 (2007) エイジング心理学, 北大路書房.

山口充 (1994) 老いの叡智—生の超越的次元での飛躍, 岡田渥美編, 老いと死—人間形成論的考察, 玉川大学出版部, pp.293-318.

Interest in Elderly People Means Interest in Life: Consideration on Psychology of Aging for University Students

KUBOTA, Miho

Although Psychology of Aging can be seen as a part of “Education about Aging for Students”, it is not only to achieve the skill necessary to super-aged society, but also to know what elderly people *actually* feel and think every day. In this paper, it is considered how university students meet elderly people’s hearts and what they can receive from the aged through watching movies or reading case studies. While students were surprised at the buried feelings of elderly people and felt those too far and too deep to touch, they found the aged close to them and felt secure. The most fascinating thing for students seemed to be something “real but invisible”, that is to say metaphysical level, which supports and encourages their life. It might be an important point for Psychology of Aging what students can learn from elderly people.